

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17377

研究課題名(和文) 地方に移住した若者のキャリアと「場所の感覚」についての社会学的研究

研究課題名(英文) Sociology of the career of young people who migrated to the rural areas and their "senses of place"

研究代表者

中島 ゆり (NAKAJIMA, Yuri)

長崎大学・大学教育イノベーションセンター・准教授

研究者番号：70581776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、若者がキャリアを形成する上で、教育、仕事、生活の場所をどのように考えているかに着目し、個人の地域選択とキャリア選択において教育・経済機会に還元され得ない社会的、文化的要因を探究することである。本研究では地方にあるA県に移住した若者を中心にインタビューとフィールドワークを実施し、「場所の感覚」には学歴とジェンダー、さらにその都会からの距離とその地域の文化に関連して形成されていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aims to explore the impact of social and cultural factors on the choices of place to live and career for young people, focusing on how they think the places of studying, working, and living in their career formation. In this study, qualitative interviews with young people who moved to the A prefecture were conducted. This study finds that the "senses of place" are constructed in association with academic background, gender, distance from a big city, and culture of the place.

研究分野：教育社会学

キーワード：若者のキャリア 地方 移住

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の問題関心は、教育機会や職業機会を求めて積極的に地域を移動する者がいる一方で、なぜ教育機会も職業機会も少ない地域にとどまったり戻ったりする者、あるいはそのような地域にあえて移住する者がいるのだろうか、というものである。

現在、東京一極集中が社会問題化し、地方創生・地方分散化が課題となっている。地方での雇用創出や地方からの人口流出を防ぐ策の検討が行われている。他方で、現状として教育機会、職業機会が少ないにもかかわらず、その地域にとどまったり戻ったり、あるいは移住して来る者がいる。かれらはなぜ雇用の少ない地域を「選択」して住むことにしたのだろうか。

本研究の目的は、若者の地域移動とキャリア選択において、教育・経済機会に還元され得ない社会的、文化的要因を探究することである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、若者のキャリアを「場所の感覚」と地域移動という視点から研究することにある。具体的には、若者がキャリアを形成する上で、教育、仕事、生活の場所をどのように考えているかに着目し、個人の地域移動とキャリア選択において教育・経済機会に還元され得ない社会的、文化的要因を探究することである。

この問題関心にもとづき本研究では若者が自らのキャリアを形成する上で「場所(place)」をどのように考えているのかという視点から研究する。「場所」には文化、人、景観などの要因が含まれる。教育を受けたり働いたり住んだりする場所をどのように考えるか、そして、自らの地元をどのように考えるかによって、キャリア展開が大きく異なると考えられる。にもかかわらず若者のキャリア研究においては地域の機会構造以外の要因についてあまり着目されてこなかった。このような「場所の感覚(sense of place)」は主として地理学者が用いる概念であるが、ギデンズやホールなどの社会学者や文化理論家もその重要性を指摘している。「場所の感覚」は地域、階層、ジェンダーのダイナミクスの中で形作られ、個人の場所アイデンティティを形作るものである。本研究は若者がキャリアを形成する上での「場所の感覚」を明らかにすることで、若者のキャリア研究に新たな視座を与えるものである。

研究代表者は、2013年度から九州地方のA県出身者(生まれてから高校までの大部分をA県で育った者)40名にインタビュー調査を実施し、かれらが教育、仕事、生活の場所をどのように考え、生まれ育った

場所(ふるさと)をどのように意味づけ、そして、そのことが自らのキャリアにどのように影響しているのかについての調査研究をおこなった(H25-26年度 科研費 若手研究(B))。

この研究過程において、A県に移住してきた他地域出身の若者と共に働いたり交流したりすることで、少なからず影響を受けていると語った者が少なからずいた。A県という場所は当然、A県出身者だけでなく移住者からも構成されているが、A県への移住者はA県出身者とは異なる「場所の感覚」をもちA県に住むことを決めたと予想される。出身者と移住者の「場所の感覚」とそれに伴うキャリアのあり方は交流によって相互に影響し変容していく可能性がある。以上の問題関心から、本研究ではA県という場所に移住してきた若者の「場所の感覚」はいかなるものであり、A県という場所をどのように意味付けているのかを明らかにし、それがA県出身者とどのように異なっているのかを検討していく。

### 3. 研究の方法

本研究は、人々の主観的な意味世界を明らかにするため、質的なインタビュー調査を実施した。調査協力者は、九州地方A県への移住者とその周りのA県出身の20~40代の若者70人である。県北、県央、県南の主に3つの町に焦点を当て、その町に住む若者を対象とした。今回の調査では町をあげて移住をすすめている町はあえて選ばないようにした。調査協力者には、四年制大学卒業者のほか、短期大学卒業生、専門学校卒業生、高等学校卒業生のいずれも含まれている。

調査協力者は、A県のイベントに参加し、そこで知り合った人たちに調査への協力を依頼した。また、調査に協力してもらった者たちには、かれらの知人を紹介してもらい、つぎの調査対象者を探した。

インタビューは、喫茶店、ファミリーレストラン、職場、自宅等、調査協力者の都合のよい場所とした。インタビュー時間は、90分程度であった。

調査協力者には、これまでの教育・職業歴・地域移動歴とその理由、キャリア展望、将来居住する(希望する)予定の場所とその理由、趣味、好きな場所、地元やその他の場所への愛着について語ってもらった。

### 4. 研究成果

(1) 移住者とその周りの出身者の「場所の感覚」

移住者は進学、結婚、仕事でその町に移住してきた消極的移住者と、その町が好きで移住してきた積極的移住者に分けられる。後者の積極的移住者は主に県庁所在地や観光で知られる町に多かった。しかし、前者

であれ後者であれ、いつかその町を離れるだろうと考えている者もいたが、その場合でも、住んでいる間はその町を活性化させたいと町の出身者ととともに活動している者たちがいた。かれらの中には、その町の出身者以上にその町の活性化に取り組み、町の出身者たちを巻き込んでいた者たちもいた。

移住者たちにこのようなことができていたのは一つに、町の出身者たちの中に「よそ者」である移住者を受け入れていた者の存在があったからである。ここで「受け入れる」とはその町から再び出ていくことを許さない、町へ囲い込む、というような態度ではなく、出身者自身がその町にある種、「選択」的に住んでいるという認識を持ち、それを背景に、移住者を自分と同様の存在だと位置づけることによって生じていた態度であった。

そして、これらの受け入れの態度は「移住者が頑張っているのに出身者である自分は何をしているのか」といった、移住者から少なからず影響を受けることによって形成されていた。

## (2) 若者の「場所の感覚」と社会階層、ジェンダー

近代化とグローバル化によって地域性は薄れ、社会や文化が画一化しているという指摘がある一方、グローバルな地域移動はエリート層によってもたらされ、そうでない人々は地方に取り残されることで、ますます格差が拡大しているとの警鐘を鳴らす研究者もいる(バウマンなど)。日本では戦前戦後ともに高学歴層は大都市圏へ移動するが、低学歴層は地元にとどまる傾向にあることが指摘されている。また、地域移動はジェンダーによる相違が指摘されており、男性は移動への親和性が高いと言われる。

これらの先行研究をふまえ、本研究は、若者のキャリア上の地域移動の前提として、そもそも場所への考え方(「場所の感覚」)がどのようなものであるのかを明らかにし、また、それが学歴、階層、ジェンダーのダイナミクスの中でどのように形作られているかを検討した。

H25-26年度の調査において、A県に住み続ける女性のうち出るのが「怖い」と表現する女性の事例から、怯えの感覚は地元を離れることを拒ませること、また、ある男性がA県には「何でもあるので出る必要がない」と述べた事例から、「何でもある」という感覚もまた地元を離れることを拒ませ

ることを一つの仮説として提示したが、今回の研究においてもこれらと同様の事例の存在が確認できた。

(3) 地域に対する考え方(「場所の感覚」)は都会からの距離とその地域の文化に関連して形成されている

本研究で対象とした町は九州で最も大きい都市である福岡からの距離が異なる。福岡から最も近い県北の町においては、日常的に仕事で福岡に行く者も多く、移住者も結婚や仕事によるという者に多く出会った。それに対し、県央は県庁所在市と観光地を含むこと、そして県南は福岡から最も遠いところにあるため、これらの場所に住む人びとは移住者も含めて普段、福岡へはあまり行くことはない。買い物は県庁所在市に行く程度であり、その県内で生活の多くが完結していた。

県北、県央では町の活性化に対する危機感はそのままで大きくない。県央は県庁所在地、観光地、そして大学があることから、A県外からの流入がもともと多いところである。この流入者のうち、この町を気に入った者が移住している。それに対し、県南の町は、観光地はあるものの、県央に比べるとその規模とA県外からの認知度は小さく、人口は減る一方である。このため、町の衰退に対する危機感是最も大きく、町おこしをしようとする若者の動きは一番大きい。

このように町の環境要件はそこに住む人びとの意識に影響を与える。それは出身者であれ移住者であれ同様である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

中島ゆり、2017年11月、地元に住む若者たち—大分の町を事例として、日本社会学会第90回大会、東京大学(口頭発表)

Nakajima, Yuri, November, 2016, Why do young people live in a rural area in Japan: Intersection of local culture with career formation, Asia-Pacific Educational Research Association (APERA) 2016 Conference, Kaohsiung, Taiwan (口頭発表)

Nakajima, Yuri, September, 2015, Thinking of the senses of place in creating career education in Japan, International

Association for Educational and Vocational Guidance (IAEVG) International Conference 2015, 筑波大学 (口頭発表)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中島 ゆり (NAKAJIMA, Yuri)  
長崎大学・大学教育イノベーションセンター・准教授  
研究者番号：70581776